

日本におけるデューイ研究史の特色と課題

— どうデューイを批判的に摂取するか? —

梶井 一暁

2016年はジョン・デューイの『民主主義と教育』が刊行されて100周年である。同書をはじめ、デューイの著作は、現在も私たちに影響を与えつづけている。彼の教育に関する思想と実践を、これまで私たちはどう研究し、どう摂取してきたか。本稿はその研究史の一断面として、紹介的受容から批判的摂取に至る過程を、近代日本における教育学の発達の過程に重ねながら捉えようとするものである。また、二元論的枠組みへの挑戦者としてのデューイ、教師教育改革におけるデューイ研究の位置という観点も交え、デューイ研究の展開と課題について検討を加える。

Keywords：ジョン・デューイ，研究史，批判的摂取，民主主義と教育

1. 先達者との向きあい——序に代えて

教育の歴史において、もっとも重要な人物は誰か。ルソーか、ロックか、ペスタロッチーか、フレーベルか、ヘルバルトか、デュルケムか、あるいはデューイか。最重要のただ一人を選ぶのは、無論、困難である。しかし、デューイが放った光彩の豊かさは、他と違わない。デューイが教育の歴史において、もっとも重要な人物のうちの一人であることは、疑いない。

彼らのなかでただ一人を選びがたいのは、単に彼らの学説の甲乙を判断するのが困難だからではない。彼らの学説はそれぞれ独自であるが、同時に影響関係を有しているからである。その影響関係は、直接的であれ、間接的であれ、また批判的であれ、継承的であれ、それぞれ先達者との対話の過程を経て生成している。この過程を重視するならば、彼らは皆がともに、教育の歴史という大河のなかで、脈々と灯明を照らしつづける先達者同士に他ならない。その灯明はいずれも欠くことができない。そして、21世紀に生きる私たちも、その大河のなか、先達者としてのデューイと向き合っている。私たちはデューイから何を継承したのか。

断っておくべきは、本稿で筆者は、日本におけるデューイ研究史の全体を満遍なく描こうとする立場

をとるものでは、必ずしもないことである。デューイ研究者はおそらくカント研究者と並んでもっとも多くを数える。研究蓄積の分厚さに敬意を表してこれをいうのであるが、デューイ研究の全体的動向を追うには、あまりにも対象者が多い。また、それぞれの研究者が手がける主題や方法も多様である。

以下の考察において筆者は、もとより非才ゆえのことであるが、デューイ研究史の全体に対して均しく論及を行うのではなく、日本の教育史・学説史の流れのなかで、デューイ研究に対してとくに進展や捉え直しの契機をもたらした、教育学の発達を促したと考えられる人物や議論に焦点を当て、日本におけるデューイ研究史の一断面を提示したい¹。その一断面とは、つまり、デューイ研究史をデューイの学問の批判的摂取の過程として把握して明かされる研究史の特色と課題である。

2. 学問的営為としてのデューイ研究——紹介的受容から批判的摂取へ

(1) 近代日本の幕明けとデューイ

デューイ (1859-1952) の学説の日本への移入は、1880年代末ころからはじまった。1888年、元良勇次郎 (1858-1912) が「米国心理学の近況」を

発表し、デューイの学説を紹介したのが、その最初と把握される²。

1888年は和暦でいえば、明治21年である。その翌年の1889年は、日本では近代憲法としての大日本帝国憲法が制定された年であった。憲法制定前の1885年には内閣制度が創設され、伊藤博文(1841-1909)が総理大臣として最初の内閣を組織した。伊藤内閣で初代文部大臣に任じられたのは森有礼(1847-1889)であった。森は学校教育制度の確立に尽力した。森は文部大臣就任の翌年、従来の学制、教育令から大きく変わる帝国大学令、師範学校令、中学校令、小学校令などの諸学校令を制定し、国民教育の制度的基盤を固めた。周知のように、日本では1868年、明治政府が誕生し、近代が幕明けた。以来、明治政府は、従来の幕藩関係にもとづく封建的な政治・行政体制を刷新し、新しく官僚機構を擁する近代的な政治・行政体制の構築を進めた。明治政府は近代化のモデルを欧米に求めた。元良がデューイの学説を日本に紹介した1880年代末は、近代国家としての日本がいよいよその実態を具備し、教育の近代化を実現しようとしていた時期であった。

元良以降も、デューイの学説の紹介はつづいた。例をあげれば、中島徳蔵(1864-1940)による『デュキー氏倫理学綱要』(育成会)の公刊(1900年)、東京帝国大学が発行する『哲学雑誌』上での桑木巖翼(1874-1946)と田中王堂(1868-1932)によるプラグマティズム論争(1900年)、上野陽一(1883-1957)による*The School and Society*(1900)の翻訳書『学校と社会』(松邑三松堂)の出版(1900年)、中島力造(1858-1918)による『解説デュウキー並タフツ「倫理学」』の発表(1903年)、菰田萬一郎(1882-1939)による*Ethics*(1908)の翻訳書『倫理学』(博文館)の刊行(1912年)、田制佐重(1886-1954)による*Democracy and Education*(1916)の抄訳書『民本主義の教育』(隆文館)の発表(1918年)、帆足理一郎(1881-1963)による同書的全訳書『教育哲学概論——民本主義と教育』(洛陽堂)の公刊(1919年)などがあった³。

このようにみると、元良以降、日本の研究者は、デューイの学説をその初期段階から、彼の生涯とほぼ同時代的に受容していたことが分かる。そして、それは近代国家の発展と国民教育の確立の歩みともおよそ重なる経過であった。

デューイの学説の歓迎は、1919(大正8)年のデューイの訪日において、一つの到達的雰囲気醸成した。デューイの訪日に対しては、渋沢栄一、新渡戸稲造、吉野作造、小野栄二郎、姉崎正治、友枝高

彦、桑木巖翼らが尽力した。彼らのうち、東京帝国大学関係者が多い。近代日本における学問の府である東京帝国大学にあって、哲学研究の主流は、井上哲次郎の態度に代表されるように、伝統的にドイツ哲学であったが、新しいアメリカ哲学への関心も強かったことがうかがえる⁴。デューイはこの訪日に際して、「現在の哲学の位置——哲学改造の諸問題(“The Position of Philosophy at the Present: Problems of Philosophic Reconstruction”)と題する連続講演(8日間8講)を東京帝国大学で行い、聴衆の耳目を集めた。聴講者は多い日で約1000人を数えた⁵。この講演は中島慎一によって翻訳され、1921年、『哲学の改造』(岩波書店)として発表された。また、同年、千葉命吉は、デューイが来日講演の内容を加筆・出版した*Reconstruction of Philosophy*(1920)を翻訳し、『哲学の改造』(同文館)として公刊した。日本訪問を終えたデューイは、次いで中国に向かった。急ぎ駆け足気味であった日本滞在に比べ、中国滞在は1921年までつづき、長期に及んだ⁶。

以上の研究動向について、2つの特色を指摘しておくべきであろう。第一は、近代日本においてデューイの学説の受容は、まずは哲学分野で中心的に進んだことである。元良は心理学を紹介したが、心理学も要は「心理上の哲学」を約めた用語であるし、つづく中島ら、主な研究者も哲学を自身の学問的基盤として、デューイの学説を受容した。教育学は近代学問体系のなかで、まだ独自の地歩を固めておらず、哲学のなかの一領域を占めるに過ぎなかった。教育学は近代学問形成における、いわば胎動期にあった。

第二は、如上のデューイの学説の受容は、その態度としては紹介的受容の域に留まっていたというべきであることである。真に学問的営為としてのデューイ研究であろうとするならば、単にその学説を歓迎し、翻訳し、紹介する域から踏み出る必要がある。すなわち、先達者としてのデューイの学説に対し、鋭意検討を加え、批判的摂取に努める態度の獲得が欠かせない。先行する学説から常に示唆を受けつつ、そこから自己の独自の立場を形成していく過程こそ、学問的営為を成立させるであろう。この批判的摂取の自覚的な態度は、たとえば、次に取りあげる篠原助市において、いよいよ鮮明となるものであった。

(2) 批判的摂取態度によるデューイ研究

篠原助市(1876-1957)は、近代日本の生んだもともと体系的な教育学者と位置づけられる一人である。「理論的教育学」と「実践的教育学」を体系化し、教育の理論と実践に関する考察を緻密に展開した。

篠原は教員養成の中央機関である東京高等師範学校に学び、同研究科修了後、福井県師範学校附属小学校で教師として教育実践に従事した。その教育実践を通じ、哲学的な教育理論への関心を強めていった篠原は、さらに京都帝国大学に入学し、哲学史を研鑽した。篠原がとくに関心を向けたのは、アメリカのデューイやドイツの新カント派の哲学・教育学であった。大学院に進み、京都帝国大学大学院を修了した篠原は、東京高等師範学校、東北帝国大学、東京文理科大学などで教授職に就くとともに、広汎な著作をもって自身の探究を世に問うた⁷。

篠原の著作のなかに『批判的教育学の問題』がある⁸。本書において篠原は「デューイの教育論」という章を設け、*Democracy and Education* (1916)を主な対象として、デューイの教育理論に対する批判的吟味を試みている⁹。篠原は東京高等師範学校の学生時代、*The School and Society* (1900)を読み、強い感銘を受けたのをはじめ¹⁰、「教育学者としてデューイの大なる」を評価する基本的態度を有するものであった。その態度を保ちながら、本書ではとくにデューイの説く「実用主義」(pragmatism)に対して検討を加え、批判的議論を展開した。この篠原の態度は、従来の紹介的受容の態度とは異なり、批判的摂取の態度と呼んでよい。「学校の社会化」、すなわち、学校における子どもの知識や技能の習得を、社会生活のなかで行われる活動や作業に結合させることの主張と実践は、デューイにおいて著名なところである。その経営によるシカゴ大学附属小学校(実験学校)はアメリカにおける教育改良運動の策源地として知られた。たとえば、篠原が、このデューイの「知識を道具となす実用主義」にもとづく教育の理論と実践に対し、「少なくとも知識を知識として追求せんとする純粹なる知識欲を児童の性情より一抹し去つた」という側面を指摘し、「実用を以て学習の第一動機となすもの」の人為性を批判したのは留意される。その指摘の背景には、ヘルバルト派の強調する「直接純潔の興味」の観点との対比があった。篠原は広くドイツ教育学も参照しながら、デューイの教育論を考察したのであった¹¹。

篠原におけるデューイの教育論の批判的摂取の態度について、次の2点を確認しておきたい。第一は、日本の学問の時代的状况である。篠原が自己の教育学を形成した1920-30年代、日本の学問は欧米の学問の単なる翻訳や紹介の域を超え、日本人なりの独自性をもって研究に取り組む姿勢が醸成されてきていた¹²。それは萌芽的であったかもしれないが、その一端が篠原の研究態度に認められるのである。上述の1919年のデューイの来日以降、日本ではア

メリカ教育学の影響が拡大した。デューイの教育思想を先進的な思想であると歓迎し、日本の教育に移植しようとする者の増加に対し、教育は国民性を基礎とすべきものであると考える篠原は、デューイの教育思想の先進性を評価しつつも、それぞれの国家や社会の特色を十分に顧慮しないでこれを移植することの拙速を見抜き、問題を提起したのであった¹³。

第二は、教育学の哲学からの自立である。篠原がデューイの実用主義を論じるとき、その問題の主眼は、それがいかに「教育上の意見と並行してあるのであろうか」ということであった。「哲学として幾何の価値を有するか」でなかった。篠原はデューイの学説を教育学の問題として引き受けようとする態度を明確に保持していた。この態度は彼の主著というべき『教育の本質と教育学』においても現れており、教育学が哲学的基礎を必要とするものでありつつも、「独自の対象と、見地と、方法を有する所に、自立的教育学の真面目は存する」と主張している¹⁴。

そして、興味深いことに、この教育学の哲学からの自立の過程は、篠原が関与した辞典の編さん作業と重なるものであった。1922年に刊行された『岩波哲学辞典』は当時を代表する哲学辞典であり、1000ページを超える浩瀚な文献であった。延べ67人が執筆者として名を連ね、篠原は教育学関連項目を担当する唯一の執筆者であった¹⁵。教育学が哲学のうちの一領域の扱いであることがよくわかるであろう。実際、この辞典でデューイの項目を執筆したのは哲学関連項目担当の一人、出隆(1892-1980)であり、篠原でなかった¹⁶。デューイはまずもって哲学における対象であった。しかし、篠原は1924年、ついに自身の単著として『教育辞典』を編さんし、これを発表するにいたった。単独の教育辞典の成立は、教育学の学問的自立を意味する。もちろん、この篠原の教育辞典にデューイの項目は収められている¹⁷。さらに篠原は1935年にはその増補版も刊行し、専門学としての教育学の基礎文献の完成に尽力した。1000ページを超える篠原の教育辞典は、如上の哲学辞典と並ぶ浩瀚さである。1920-30年代、日本の研究者においてデューイ研究をはじめ、欧米の哲学・教育学の研究を批判的摂取の態度で進める学問的態勢の必要が自覚されていく過程は、教育学を哲学から自立させ、教育学の専門学としての確立をめざしていく過程と重なるものであった。篠原はその過程の中心に位置した一人であったといえる。

付言するならば、1930年代は日本で軍国主義的潮流が国民教育にもおよぶ時期であった。その時局にあって、篠原を含む教育学者は、いかに教育の「歴史的民族的性格」を闡明し、東洋や日本を再発見し、

再認識していくのか。近代教育学者における「日本的なもの、日本人としての自己認識」を希求する態度の形成過程は、近代学問としての教育学の成立過程と重ねて考察が加えられるべき今日の研究課題であろう¹⁸。

3. 第二次世界大戦後の日本とデューイ研究

(1) 日本デューイ学会の創設と研究成果の発信

1945年、日本は敗戦した。戦後の日本は、民主主義にもとづく国家再建のモデルをアメリカに求めた。教育は国民の義務から国民の権利へと変わり、新しい憲法は国民の教育を受ける権利の保障を謳った。戦前、篠原は上述の「デューイの教育論」で「彼の教育思想は首尾一貫した米国式のものである」と述べるものであったが、戦後、アメリカ的思考方法の原理として、アメリカの哲学、なかでもデューイの思想への関心はいよいよ増大した。とりわけ教育学の領域でデューイの思想の摂取は顕著であった。教育学者はデューイの民主主義にもとづく教育理論を研究するだけでなく、その教育理論の基盤や背景を明らかにする意図から、哲学の領域にまで研究を広げるようになった。教育学者によってデューイの総合的研究が手がけられるようになったのである¹⁹。デューイの思想は、戦後日本の教育に大きな改革をもたらす原動力となった。

戦後のデューイ研究を推進した中心的組織は、1957年に発足した日本デューイ学会である。学会設立には、永野芳夫（広島大学）、広池利三郎（東洋大学）、大槻春彦（横浜市立大学）をはじめ、植田清次（早稲田大学）、大浦猛（東京教育大学）、長田新（広島大学）、岸本英夫（東京大学）、荘司雅子（広島大学）、武田一郎（お茶の水女子大学）らが主導的役割を果たした²⁰。

日本デューイ学会は「デューイ研究者の協同機関であって、同時に広くアングロ・アメリカ的な哲学・教育等に関心を持つ者の研究団体」（会則）である。戦後日本におけるデューイ研究を質と量の両面において牽引してきた。同学会が設立以来、公刊をつづける機関誌『日本デューイ学会紀要』は、現在までに第56号（2015年10月発行）を数える。多くの研究論文を掲載し、研究成果を世に発信してきた。研究大会の開催も活潑であり、来る2016年9月には第60回大会の開催が予定されている。

加えて留意されるのは、日本デューイ学会はこれまでに下記の3冊の論集を編さんし、公刊していることである。各論集はその副題に示されるように、デューイの生誕100周年や来日50周年など、歴史の節目に編まれている。つまり、3冊の論集は、そ

れぞれの時代に進められ、蓄積されたデューイ研究の総括の意味を有している。各論集に収録された論文を通覧すると、その時々研究者が向き合った主題が何であったかが把握される。以下にその収録論文と著者を示す。

①『デューイ教育理論の諸問題——デューイ誕生百年祭を記念して』（刀江書院、1959年）

「序文」（長田新）、「記念論文集によせて」（H・G・ハルフィッシュ）、「教育史上におけるデューイの位置」（荘司雅子）、「ジェイムズからデューイへ」（土井嗣夫）、「ヘーゲルとデューイ」（前原寿）、「デューイの知識論」（芝田不二男）、「デューイのアメリカ文化論」（胡豊四）、「デューイの自然と教育」（虎竹正之）、「デューイの道德教育論」（松浦鶴造）、「デューイの教育的信条」（岸本幸次郎）、「日本におけるデューイ研究」（上寺久雄）、「デューイのための弁明」（門秀一）、「デューイ批判覚え書」（ヴァーノン・カールスン／長田新訳）、「デューイへの旅」（永野芳夫）、「日本におけるデューイ研究目録」（上寺久雄）

②『デューイ研究——デューイ来日五十周年記念論文集』（玉川大学出版部、1969年）

「序」（ロバータ・デューイ）、「はしがき」（鯉坂二夫）、「東洋文明は精神的にして西洋文明は物質的なりや」（ジョン・デューイ）、「自然科学に於ける理想主義」（ジョン・デューイ）、「科学と現今の産業制度」（ジョン・デューイ）、「人種的偏見の哲学的解釈」（ジョン・デューイ）、「太平洋会議」（ジョン・デューイ）、「アブストラクト」（網岡四郎）、「一九一九年当時の日本におけるデューイの記録」（三浦典郎）、「日本におけるジョン・デューイ研究の歴史」（森章博）、「デューイとわが教育界の戦前・戦後」（武田一郎）、「John Dewey's Influence in Japan」（永野芳夫）、「デューイ教育学の基本諸原理」（永野芳夫）、「ジョン・デューイにおける初期教育思想の形成」（大浦猛）、「デューイ教育哲学の根本問題」（上寺久雄）、「デューイの場の思想がその教育学説を規定せる性格について」（竹田加寿雄）、「ジョン・デューイにおける自我実現の理論と道德教育」（徳永保）、「デューイの教育哲学におけるコミュニティの理念の意義」（西田文夫）、「デューイの言語思想」（米盛裕二）、「Dewey in Japan: A Fleeting Moment in 1919?」（Victor・N・小林）、「社会・歴史・教育」（鯉坂二夫）、「〈経験〉の系譜」（大槻春彦）、「デューイのヒューマニズムと教育」（荘司雅子）、「デューイと新形而上学」（峰島旭雄）、「ジョン・デューイについての思い出」（原田実）、「The History of

the John Dewey Society of Japan」(永野芳夫), 「あとがき」(荘司雅子)

③『日本のデューイ研究と21世紀の課題——日本デューイ学会設立50周年記念論集』(世界思想社, 2010年)

第1部: 日本におけるデューイ哲学の展開と評価 / 「日本におけるデューイ哲学思想の受容と発展」(早坂忠博), 「明治期におけるデューイ倫理学の評価と課題」(行安茂), 「デューイと大正デモクラシー」(笠松幸一), 「デューイの日本文化探究論再考」(早川操), 「デューイの自然主義的芸術論」(立山善康), 「デューイと現代の社会正義思想」(生澤繁樹), 「デューイの環境哲学が21世紀を生きる私たちに示唆するもの」(龍崎忠)

第2部: デューイの教育理論と実践 / 「デューイ教育理論の実践可能性と課題」(市村尚久), 「ポスト産業主義時代の学習活動を展望する」(上野正道), 「デューイ思想と環境倫理学」(黒柳修一), 「デューイ教育思想と生活綴方」(安部貴洋), 「デューイの道徳教育論とプラグマティズム」(柳沼良太), 「デューイの道徳授業論」(齋藤勉), 「P・W・ジャクソンによるデューイ道徳教育論の継承と発展」(佐藤隆之), 「デューイ教育理論への実践的関心の本格的高まりを迎えて」(杵淵俊夫)

ここでは近著の③『日本のデューイ研究と21世紀の課題』について言及しておく。本書は副題のとおり、日本デューイ学会設立50周年記念論集である。本書では日本におけるデューイ研究の過去と現在が顧みられている。第1部「日本におけるデューイ哲学の展開と評価」では、明治期以降のデューイ研究の展開について、哲学と教育学を両翼として推進されてきた過去が再確認されるとともに(早坂, 行安, 笠松, 早川), デューイの思想の現在性について、21世紀の重要課題である「環境」「正義」「自然」「芸術」などの観点から評価が試みられている(立山, 生澤, 龍崎)。「生存」「暴力」「宗教」「福祉」などの観点からデューイの思想の現在性を探究する論考が含まれなかったのは、引きつづき、今後に託された課題であろうか。

デューイの思想は、哲学、社会学、心理学、政治学、芸術論、宗教論など、日本の思想界に広く影響を与えつづけているが、なかでも教育学への影響は大きい。デューイの実験主義や経験主義、民主主義にもとづく教育理論は、研究の域にとどまらず、実践の域にも移された。学習活動、単元学習、道徳教育、生活経験、生活綴方、子ども中心主義などが考察される第2部「デューイの教育理論と実践」を読むと、戦後の日本の教育が、デューイを離れて語る

ことの困難な営為として成り立っているものであることが、改めて印象づけられる(市村, 上野, 黒柳, 安部, 柳沼, 齋藤, 佐藤, 杵淵)。

諸論考のなかでも筆者に気づきを与えたのは、安部が東北地方の農村の小学校で実践された生活綴方の特質を分析する際に指摘した次の点である。それは戦後日本におけるデューイ思想受容の問題点、すなわちデューイが生きた時代の社会背景と戦後日本のそれとの相違が顧慮されないまま、その思想が戦後日本で受容された結果としての「新教育」の実践の限界という点である²¹。この指摘は、遡って篠原が1922年の『批判的教育学の問題』のなかで行った問題提起を想起させるばかりか、進んで21世紀初頭現在、日本の教育の現状をも照らすからである。篠原は外国の教育(学)の従順的受容の傾向に対して問題提起を行い、国民性を基礎とする学としての教育学を粘り強く構築することの必要、社会・文化の特色を顧みたま教育を実践することの重要を主張した。そして、現在はどうか。今日、日本の教育において、外国に先進モデルや改革モデルを求め、その導入により教育の振興を図ろうとする傾向は強くなるばかりであるように思える。比較事例をもち、これを検討し、参照すること自体はよい。しかし、国や研究者がしばしばみせる態度は、外国でその事例を成り立たせている背景としての歴史的文化的基盤の精査を省き、「先進」や「改革」の美しき言辞のもと、そうした基盤から切り離された、いわば「上物」としての制度やプログラムの導入を急ぐ安直さである。この態度は、歴史のなかで育ててきたはずである批判的摂取の態度とはいいがたい。そして、デューイ自身、自分の実践がその置かれた社会的文脈から切り離され、教育改革プログラムとして機械的に適用されることを恐れるものであったのである²²。

(2) 日本の戦後教育とデューイ

もちろん、戦後日本の教育とデューイをまなざした研究は、日本デューイ学会が編さんした如上の論集のみにおいて著されているわけではない。たとえば、杉浦宏編『日本の戦後教育とデューイ』は、デューイの教育思想が日本の戦後教育に及ぼした影響について、方法論、教師論、教育理論などを主題として検証する論文を収録し、新時代の教育がめざすべき方向を探ろうとする論集である²³。編者の杉浦には、単著で『デューイ教育思想の研究』、『J・デューイ研究』、『デューイの自然主義と教育』などもあるが²⁴、引きつづき、編者として論集『現代デューイ思想の再評価』を刊行し、新しい研究成果を発信している²⁵。この論集は世紀転換期のアメリカで生じた「デュー

イ復興」の動向を受け、主題も教育思想、哲学、倫理学、心理学、社会科学、価値論、科学論、宗教論、芸術論、ポストモダニズム、フェミニズムなど、新たな観点も考察の視野に収め、デューイの思想の捉え直しを試みようとするものである。世紀転換期に編まれた如上の両論集は、デューイの思想と実践が、20-21世紀をまたいで私たちに対して刺激と示唆を与えつづけていることを改めて認識させる。

4. デューイ研究をめぐる特色と課題

次に、今日までの日本のデューイ研究において留意される特色を、課題とともに指摘し、今後の研究の展望を、ささやかながら示しておきたい。ここでは『民主主義と教育』、二元論、教師教育の3つに焦点を当てたい。

(1) 『民主主義と教育』に対する関心と課題

『民主主義と教育』(1916)はデューイの名著とあってよい重要著作であり、デューイの数多くの著作のなかでも、もっとも読まれている一冊である²⁶。日本では戦前の田制佐重や帆足理一郎による翻訳をはじめ、戦後も松野安男、金丸弘幸、河村望らによる翻訳があり²⁷、現在まで継続して読者を得てきている。とくに松野の翻訳による『民主主義と教育』は岩波文庫として出版され、広く読者を得ている²⁸。その松野が「訳者解説」のなかで記すように、やはり並んで重要著書である『学校と社会』(1900)がシカゴ大学での実験学校の試みを中心とする議論を展開し、いまだ十分にデューイの思想全体と融合していない教育論であった観を残すのに対し²⁹、『民主主義と教育』はおおよそデューイの思索の全成果の教育論的表現になっている³⁰。

日本でこの『民主主義と教育』に対する研究は、どのような関心のもとに進められたか。その特徴として第一に気づくのは、近年、『民主主義と教育』を単独の考察対象とする文献研究の成果は、管見の限り、目立ったものはないことである。意外に思うかもしれない。しかし、このことは、日本のデューイ研究が『民主主義と教育』を軽視するものであることを意味しない。そうではなく、田制や帆足の翻訳業績以来、現在まで一貫して本書はデューイの重要著作として、私たちにおいて認識されてきている。そして、その認識は教育理論の研究者においてだけでなく、教育の実践者においても共有されている。前述の東北地方の小学校で子どもの指導を行う教師が『民主主義と教育』を読み、自身が試みる実践のなかでデューイの教育理論を批判的に捉え直していく過程があったことの例に、それは端的に示されている。

では、なぜ本書に対する個別的研究が見当たらないのか。それは、近年の日本の研究者における問題関心の有し方によるといえる。すなわち、日本の研究者は、デューイの教育理論を個々の著作に対して文献研究を行うことで理解することを基礎作業として、そのうえで、デューイの教育理論の体系としての著作群に対して関心を向け、自身の研究視角から多様にデューイの教育理論を読み解き、応用することを志向している。たとえば、教師教育、道徳教育、言語教育、歴史教育、芸術教育、体験学習、総合学習などという研究視角である。とすると、検討すべき著作は『民主主義と教育』を超え、『学校と社会』はじめ、『子どもとカリキュラム』(1902)³¹、『人間性と行為』(1922)³²、『経験としての芸術』(1934)³³、『経験と教育』(1938)³⁴などに及び、その包括的考察のうえに自身の研究主題を展開することとなる。たとえば、西園芳信の近著『質の経験としてのデューイ芸術的経験論と教育』は、デューイ芸術論における「質の表現」の理論的解明を通して、芸術的経験によって質を認識する芸術教育哲学を探究するものである³⁵。芸術科系カリキュラムの構成原理を基礎理論と実践理論の両視角から究明する研究を進めてきた著者の問題関心が生んだ特色的なデューイ研究の成果といえる。

第二に、デューイにおいて「民主主義」の定義の変化はなかったか。デューイは『民主主義と教育』で「民主主義は単なる政治形態でなく、それ以上のものである。つまり、それは、まず第一に、共同生活の様式、連帯的な共同経験の様式なのである」と定義してみせ、私たちの眼を見開かせた³⁶。「人々がある一つの関心を共有すれば、各人は自分自身の行動を他の人々の行動に関係づけて考えなければならないし、また自分自身の行動に目標や方向を与えるために他人の行動を熟考しなければならないようになるのだが、そのように一つの関心を共有する人々の数がますます広い範囲に拡大して行くということは、人々が自分たちの活動の完全な意味を認識するのを妨げていた階級的、民族的、国土的障壁を打ち壊すことと同じことなのである」。そして、「抑圧されたままの諸能力が、多数の多様な接点によって解放されるようになるのである」。加えて、民主主義における教育とは何かを問うデューイは、教育は子どもの現在の経験から出発し、その経験を絶え間なく再構成していく連続的成長の過程そのものであることを洞察した³⁷。ここでデューイが下した民主主義と教育をめぐる鮮烈な定義と洞察は、私たちに大きな影響を与えた。しかし、私たちはこの定義と洞察に満足したままで、立ち止まっ

いけないのかもしれない。なぜなら、デューイは『民主主義と教育』以降、民主主義の定義を限定している。民主主義の定義に変化があるのである。しかし、この変化を追究した本格的な研究は、長く見当たらないのではないか。この研究史上の問題点は、はやくカールスンが指摘するところであるが³⁸、たしかに1930年代にはデューイが使う民主主義は、やや光彩を鈍らせる。たとえば、デューイは1930年の『新しい個人主義の創造』では「民主主義は貴族制と同様、あいまいな理念である」と述べ、「民主主義が、知的活動のそとに置かれ、道徳や宗教を上からの権威によって与えられてきた大衆にたいし、批判力と識別力をすぐにも与えるとは期待できない」と告げている³⁹。デューイは『民主主義と教育』で「いっそう多様な個人的能力が解放されることは、民主主義を特色づけるものである」と述べ⁴⁰、民主主義の理想を実現するため、教育に熱い視線を注いでいたはずでなかったか。教育を通して、個人のさまざまな資質や興味の自由な発達を促し、主体的に行う人間を確立できると、力説していたはずでなかったか。また、1935年の『自由主義と社会的行動』では「民主主義の失敗」「民主主義の危機」と語るに至っている⁴¹。デューイの民主主義の定義の変化は、1930年代の時代状況と鑑みれば、アメリカ民主主義は国内外において全体主義と共産主義からの攻撃にさらされ、アメリカ思想の根本的特質である個人主義は産業化社会が要請する集合主義との調整が求められていた状況と無関係ではないであろう。人物と時代という主題からデューイを描いた研究として、田浦武雄『デューイとその時代』があるが⁴²、さらにデューイの思想の歴史的被規定性を問う研究の進展が待たれるところである。

日本のデューイ研究史において、『民主主義と教育』以降のデューイにおける民主主義の定義の変化に対する追究が手薄であったとすれば、それは次の研究動向の特色と関連があるだろう。すなわち、日本の研究者の関心が、デューイの「初期」、もう少しいえば、附属小学校（実験学校）を含むシカゴ大学時代までに向けられることが多かった傾向である。無論、『民主主義と教育』はデューイがコロンビア大学に移ってからの著作であるが、シカゴ大学での研究と実践の否定のうえに立つものではない。

「デューイにおける初期教育思想の形成」を副題にもつ大浦猛『実験主義教育思想の成立過程』や笠原克博『初期デューイ教育思想の課題』は研究題目に示されるとおりであるし⁴³、亀尾利夫『デューイの哲学』、栗田修『デューイ教育学の起源』、同『デューイ教育学の特質とその思想史的背景』も、初期デュー

イ研究の成果といえる⁴⁴。さらに森田尚人『デューイ教育思想の形成』は、今日までのデューイ研究における教育思想史的研究の到達の一つを示す成果である⁴⁵。森田は初期デューイの思想的発展について、教育思想の形成を基軸に据えて考察し、「初期」を主題とすることの研究意義を次のように強調している。すなわち、デューイの思想形成過程のなかで教育関心の成立根拠を問うことを通じ、デューイの思想を総体として把握することの可能である。デューイの思想形成過程の分析という教育思想史的研究に対する積極的視角が提出されている。

(2) 二元論的枠組みへの挑戦者としてのデューイ

「近代哲学の父」と称されるデカルト以降、対立的二元論の思惟様式は近代哲学の特徴であった。主体と客体、知識と行為、観念と存在、理論と実践、個人と社会という具合である。デューイの思想も対立的二元論に立つ性格のものであったか。

なるほどデューイにおいても、その著作をみると、「AとB」という二項対立的な題目を冠するものが多いことに気づく。たとえば、*The School and Society*（学校と社会、1900）、*The Child and the Curriculum*（子どもとカリキュラム、1902）、*Interest and Effort in Education*（教育における興味と努力、1913）⁴⁶、*Human Nature and Conduct*（人間性と行為、1922）、*Experience and Nature*（経験と自然、1925）⁴⁷、*Individualism: Old and New*（新旧個人主義、1930）⁴⁸、*Liberalism and Social Action*（自由主義と社会行動、1935）⁴⁹、*Experience and Education*（経験と教育、1938）、*Freedom and Culture*（自由と文化、1939）⁵⁰などの如くである。

では、このように二項対立的な題目を好んで用いたデューイにあって、その議論は「AかBか」という二者択一を要請するものであったか、と問えば、否である。森田尚人が指摘するように、デューイの議論に特徴的であるのは、外見的には対立しているかのように捉えられる二者の根底に、実は共通する原理が潜んでいることに眼を差し向けていることなのである⁵¹。たとえば、「子どもとカリキュラム」というとき、そこに教科中心カリキュラムを主張する旧教育派と、子どもの経験や自己活動を重視する新教育派との対立をみるのが一般であるが、デューイは、この両派の対立の根底において、成熟した大人と未熟な子どもは質的に区別されるべきだという固定的な観点が共有される、両派に通底的な磁場が存することを指摘する。そして、デューイが得るのは、教科か経験か、という二者択一の必要ではなく、教科に蓄積された社会的経験としての事実と真理は、子どもの経験の向かうべき方向を指し示すもの

として、子どもの成長にとって不可欠な構成要素となるものであるという、教科と経験の両価性への洞察なのである⁵²。一見、相対立すると考えられているものを統合しようとする試み、すなわち二元論的枠組みの克服こそ、デューイの保持する立場の軸であった。

デューイの思想全体を貫く姿勢が対立的二元論に対する異議申し立てであったことを指摘したのは、モートン・ホワイトであった⁵³。本間長世はホワイトの考察を引用しつつ、次の側面を確認している⁵⁴。すなわち、『民主主義と教育』のなかの「二元論」をみると、活動と知識、訓練と興味、権威と自由、個性と制度、知性と性格、目的と手段、身体と心理、論理的方法と心理的方法、個別と一般などを挙げることができるが、それらはそれぞれAとBの対立や断絶を強調するものではなく、むしろその統合や包摂を主張するものであり、デューイが反二元論的思惟を押し通していることである。

たしかに、デューイの教育観の代名詞的文句となっている「社会的個人」や「為すことによって学ぶこと」という表現は、対立二元論的枠組みへの挑戦者としてのデューイの姿勢をよく示している。デューイは西洋近代社会に支配的な対立的二元論を完全に解消しようとしたわけではなかったかもしれない。しかし、他方を排除しない両価的目線を差し向ける努力を傾けるその姿勢は、ひるがえって私たちに「中庸」のあり方を想起させるものでないだろうか⁵⁵。

(3) 教師教育改革とデューイ研究

日本でデューイ研究の展開が顕著な領域の一つが教師教育論であることは、おそらく日本に特徴的な研究動向であろう。ことに近年、日本の大学・大学院で教師教育改革が進行しており、教師教育の高度化と専門職化が図られている。たとえば、2008年に教職大学院が「教師の資質向上の専門職大学院」として新設され、教育の専門家教育を開始した。これは法学分野で2004年、法科大学院が先行発足し、新しい法曹教育を開始したのにつづく、専門家教育の着手であった。教職大学院の創設と拡大の背景には、従来の大学院教育学研究科は研究志向が強く、学校現場の課題に適切に応えていないという批判があった。教職大学院に要請されたのは、即戦力の実務家としての教師の養成であった。また、教師免許も標準免許を学士課程程度から修士課程程度に引き上げる議論が加速している。21世紀の教師教育改革期にある現在の日本において、デューイの教師教育に関する理論や実践に対し、まして光が当てられているのである。

教師教育改革とデューイ研究をめぐる、2つの動向に留意したい。第一は、デューイの教育専門職養成の試みを歴史的に追究する研究である。周知の如く、デューイ研究は、1969年から1990年にかけて逐次刊行された『デューイ著作集』全37巻により⁵⁶、質と量の両面で大きな発展をみた。これに近年、『ジョン・デューイ書簡集』の公刊が加わり⁵⁷、さらなる進展が期待されている。この書簡集を駆使し、デューイの教師教育改革に関する歴史研究を前進させた代表的成果が、小柳正司『デューイ実験学校と教師教育の展開』である⁵⁸。デューイが直接、教師教育に関わったのはシカゴ大学時代(1894-1904)である。小柳は、シカゴ大学時代のデューイが精力的に取り組んだ実験学校(附属小学校)の経営が、終始、師範学校の徒弟訓練型の教師教育から、大学の科学研究による教育専門職養成としての教師教育への転換を見据えたものであったことを実証した。小柳は書簡という私文書を読解することにより、等身大のデューイに目線を向けることに成功している。

小柳の研究が示す知見のなかでもとくに興味深いのは、次の諸点である。①デューイは現職教師を対象とする教育専門職養成に強い意欲をもっており、その養成教育のために実験学校を重視していたこと、②実験学校を中核とする初等中等一貫学校を設立し、この学校を研究校兼実習校とする新時代の初等中等教師教育を実現しようとしていたこと、③教育専門学部創設の構想を有し、この学部に大学院課程を開設し、大学院レベルの教育専門職養成を行い、Ed.D. (Doctor of Education, 教育専門職博士号)課程の新設も準備していたこと、などである⁵⁹。Ed.D.は、研究学位であるPh.D.と区別される専門職学位である。デューイは教育専門職学位が法学や医学の分野の専門職学位と同様に、広く社会に認知されることを展望していた。

佐藤学は近著『専門家として教師を育てる』において、デューイが教師教育改革に対する2つの提言を行っていたことを指摘している⁶⁰。教師教育の課題は他の専門職(医師や法曹)の教育の課題と同様に専門家教育の課題であることと、「徒弟制の教育」から「理論と実践の統合」を中心とする「実験的方法」による専門家教育へと改革すること、である。この提言は1904年になされたものであった⁶¹。現在、日本を含む世界各国で展開する教師教育改革は、1世紀以上も以前にデューイが洞察した方向のうえに進んでいると、佐藤はみている。教師教育の高度化と専門職化は、医師や法曹の専門家教育と同様の論理によって展開しており、専門家教育の先行モデ

ルを医師教育と法曹教育に求めることにより、改革と政策の基本的枠組みと理論研究が発展している⁶²。デューイによるEd.D.構想は、教師教育改革の歴史における一つの到達を示しているといえる。

なお、日本の研究大学におけるEd.D.課程は、名古屋大学や広島大学などで開発・実施が進められている⁶³。

第二は、近年の教師教育改革において鍵概念となっている「省察」(reflection)とデューイの教育理論の連関を考察する研究である。周知のように、「省察」はドナルド・ショーンが*The Reflective Practitioner* (1983)において専門家像の変革を論じた際に鍵とした概念である⁶⁴。ショーンは従来の「技術的合理性」にもとづく「技術的熟達者」(technical expert)としての専門家像に対し、新しい専門家像として「行為の中の省察」にもとづく「反省的实践家」(reflective practitioner)を提示した。「省察」という概念を基軸にして新しい専門家像を開示したのは、直接的にはドナルド・ショーンであったが、ショーンはデューイ研究の取り組みのうえに「省察」概念を築いたのであった。すなわち、デューイが『思考の方法』(1910)で提示した「反省的思考」(reflective thinking)が⁶⁵、「デューイの探究の理論」を研究したショーンにより、新しく専門家の実践の中核に定位され、「反省的实践家」の概念は提起された。ショーンの著書は佐藤学と秋田喜代美により『専門家の知恵』として翻訳・発表され⁶⁶、現今の日本の専門家教育に顕著な影響を与えている。「省察」はもはや新奇な概念ではなく、大学・大学院の教育学の授業で論及される代表的な概念となっているし、学生も卒業論文や修士論文でよく選ぶ主題となっている。デューイの「反省的思考」を批判的摂取したショーンが導く「反省的实践家」としての教師論を、次いで私たちはどう批判的摂取し、新しい教師教育改革の歴史を刻んでいくのか。先達者としてのデューイとの対話を、私たちは継続していく。

5. 哲学者と教育者——結に代えて

デューイ研究の展開における大きな特徴は、その教育理論が研究の域を超え、実践の域に移され、理論と実践の往還が進展していることである。歴史的にみれば、そのあり方は、たとえば、日本では小原國芳(1887-1977)⁶⁷、中国では陶行知(1891-1946)⁶⁸らの営為において顕著に確認できるであろう。また、現代の教育においても、民主主義を連带的協同的な経験や生の一様式として意義づけようとしたデューイの教育理論は、佐藤学が主導する「学びの共同体」や「協同的な学び」の実践に引き受け

られている⁶⁹。

かつて篠原助市は「教育学と哲学と爾く、密接の関係を有するが故に、哲学者は同時に人生の教育者である」と述べた。たしかに、私たちは「哲学者としてのデューイ」についても「教育学者としてのデューイ」についても語りうる。新しい時代において、教育の理論と実践の両輪的探究はますます重要となる。しかし、その真の探究はなかなか容易でない。なぜなら、おそらくそれは、理論の実践への安直な落とし込みの先に具現するものではない。理論と実践の相互研鑽的な緊張関係の構築のうえに結実するものではないだろうか。哲学者であり、教育者であるデューイを粘り強くまなごすことは、教育の理論的実践的探究の意義をついに照射することとなるはずである。

註

- 1 日本におけるデューイ研究史の全体的整理については、森章博の労作『日本におけるジョン・デューイ思想研究の整理』(秋桜社、1992年)があり、参照される。
- 2 元良勇次郎「米国心理学の近況」『六合雑誌』93, 1888年。元良はアメリカ留学の経験があり、ボストン大学やジョンズ・ホプキンス大学に学んだ。留学中にデューイの講義を聴く機会もあったようである。筆者は近代学者の宗教観についても関心を向けており、その観点からすると、元良は、たとえば、仏教者(浄土真宗僧侶)の近角常観と親近し、学術的にも精神的にも交流が深かったことは留意される二人の接点である。岩田文昭『近代仏教と青年——近角常観とその時代』岩波書店、2014年、pp.33-35。
- 3 早坂忠博「日本におけるデューイ哲学思想の受容と発展」, 日本デューイ学会編『日本のデューイ研究と21世紀の課題』世界思想社、2010年、pp.4-7。行安茂「明治期におけるデューイ倫理学の評価と課題」, 同上書、pp.21-25。
- 4 笠松幸一「デューイと大正デモクラシー」, 同上書、pp.31-36。
- 5 同上、笠松論文、p.36。
- 6 佐藤尚子「デューイと中国」, 『日本デューイ学会紀要』28, 1987年。
- 7 木内陽一「篠原助市教育学の形成と構造」, 『篠原助市著作集』7(訓練原論・解説・略年譜), 学術出版会、2010年、pp.1-3。
- 8 篠原助市『批判的教育学の問題』宝文館、1922年(篠原助市著作集1, 学術出版会、2010年、復刻、pp.332-390)。

- 9 篠原は「デューイの教育論」を京都哲学会の機関誌『哲学研究』の第2巻第12冊(1917年)と第3巻第1冊(1918年)で発表している。本書の「デューイの教育論」はこの論文を再録するものである。篠原におけるデューイ思想の批判的摂取に関連して、米澤正雄「京都帝国大学・同大学大学院在学中の篠原助市における『批判的教育学』確立とデューイ教育思想批判との関係の解明」(『アジア文化研究所年報』47, 2013年)がある。
- 10 篠原はそのときの興奮を「米国のデューイの著書に初めて接したのも研究科時代であった。忘れもしないが、三十八年二月十一日の紀元節に、偶然彼の『社会と教育』J. Dewey; School and society. を見つけ、ストーブに腰掛を引き寄せて読み始めた。デューイの説が、今迄学んだ教育学と全然違っているのに驚かされ、驚きの中から興味が湧き立ち、その日の午後一気に読み終えた」と述懐している。篠原助市『教育生活五十年』相模書房出版部, 1956年(伝記叢書4: 篠原助市, 大空社, 1987年, 復刻, p.71)。
- 11 ただし、その篠原にあって、彼がドイツ教育学を批判的摂取しながらも、とくに新カント派の思考を脱しえず、シュプラランガーらの精神科学的教育学を十分に検討し、包括的な論究に及ぶには至っていない限界については、木内により指摘されている。篠原は新カント派のなかでもナトルプやヴィンデルバントの哲学に関心を寄せた。篠原が教育の作用を「自然の理性化」や「個性の歴史化」として理解していく背景に、新カント派の哲学からの影響があった。前掲, 註7, 木内論文, p.8。前掲, 註10, 篠原書(1987), p.174。
- 12 前掲, 註7, 木内論文, p.2。子安宣邦「日本倫理学の方法論的序章」, 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店, 2007年, p.260。
- 13 しかし、篠原における国民性を基礎とする教育の重視は、時局にあっては、他国に対する日本の特異性や優位性を肯定する文脈に沿う視点に化しうる契機を胚胎した側面も検討される必要があろう。
- 14 前掲, 註7, 木内論文, p.2。篠原助市『教育の本質と教育学』教育研究会, 1930年(篠原助市著作集3, 学術出版会, 2010年, 復刻, pp.417-418)。
- 15 宮本和吉他編『岩波哲学辞典』岩波書店, 1922年(増訂版, 1924年)。篠原は都合71項目を執筆している。
- 16 同上, 出「デューイ, ジョン」, p.673(増訂版)。
- 17 篠原助市『教育辞典』宝文館, 1924年(増訂版, 1935年, pp.658-659)。篠原は参照文献として、永野芳夫『デューイ教育学説の研究』(大同館書店, 1920年)を挙げている。永野には『デューイ哲学説の研究』(大同館書店, 1922年), 『デューイ論理学説の研究』(大同館書店, 1926年)などの著作もある。永野によるデューイ研究に関する一連の著作は、「デューイ」の名前を冠した最初の本格的専門書と把握され、意義深い。
- 18 前掲, 註7, 木内論文, pp.8-9。
- 19 現在の学会員は約300人である。学会員を教育学と哲学の分野別で見ると、約4分の3が教育学、約4分の1が哲学となる。前掲, 註3, 早坂論文, p.11。
- 20 同上, 早坂論文, pp.8-10。
- 21 安部貴洋「デューイ教育思想と生活綴方」, 『日本のデューイ研究と21世紀の課題』世界思想社, 2010年, p.151。
- 22 森田尚人「ジョン・デューイと未完の教育改革」, 原聰介他編『近代教育思想を読みなおす』新曜社, 1999年, p.112。
- 23 杉浦宏編『日本の戦後教育とデューイ』世界思想社, 1998年。
- 24 杉浦宏『デューイ教育思想の研究』刀江書院, 1962年。同『J・デューイ研究』清水弘文堂, 1970年。同『デューイの自然主義と教育』明治図書, 1983年。
- 25 杉浦宏編『現代デューイ思想の再評価』世界思想社, 2003年。
- 26 John Dewey, *Democracy and Education: an Introduction to the Philosophy of Education*, New York: the Macmillan Company, 1916 (Text-Book Series in Education, ed. by Paul Monroe, New York: the Macmillan Company, 1921)。
- 27 松野安男訳『民主主義と教育』(上・下, 岩波書店, 1975年), 金丸弘幸訳『民主主義と教育』(西洋の教育思想19, 玉川大学出版部, 1984年), 河村望訳『民主主義と教育』(デューイ=ミード著作集9, 人間の科学社, 2000年)などがある。また、抄訳として荘司雅子・土井嗣夫・上寺久雄共訳『ジョン・デューイ』(刀江書院, 1961年)もある。
- 28 1975年の1刷以降, 2016年までに上巻は32刷, 下巻は28刷を数える。
- 29 こちらも岩波文庫に入っている。宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店, 1957年。他に文部省訳『学校と社会』(日本書籍, 1905年), 頼順生訳『学校と社会・児童の世紀』(世界教育文庫刊

- 行会, 1935年), 宮原誠一訳『学校と社会』(春秋社, 1950年), 毛利陽太郎訳『学校と社会』(世界新教育運動選書10, 明治図書出版, 1985年), 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』(講談社, 1998年), 河村望訳『学校と社会・経験と教育』(デューイ=ミード著作集7, 人間の科学社, 2000年)などがある。
- 30 前掲, 註27, 松野訳書(下巻), p.253。
- 31 翻訳は, 杉浦宏訳『児童とカリキュラム』(関書院新社, 1967年), 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』(講談社, 1998年)などがある。
- 32 翻訳は, 今泉浦治郎訳『道徳の改造——人間性と行為・社会的心理学序説』(宝文館, 1923年), 東宮隆訳『人間性と行為——社会心理学序説』(春秋社, 1951年, 新訳版, 1960年), 河村望訳『人間性と行為』(デューイ=ミード著作集3, 人間の科学社, 1995年)などがある。
- 33 翻訳は, 鈴木康司訳『経験としての芸術』(春秋社, 1952年), 河村望訳『経験としての芸術』(デューイ=ミード著作集12, 人間の科学新社, 2003年), 栗田修訳『経験としての芸術』(晃洋書房, 2010年)などがある。
- 34 翻訳は, 原田実『経験と教育』(春秋社, 1950年), 河村望訳『学校と社会・経験と教育』(デューイ=ミード著作集7, 人間の科学社, 2000年), 市村尚久訳『経験と教育』(講談社, 2004年)などがある。
- 35 西園芳信『質の経験としてのデューイ芸術的経験論と教育』風間書房, 2015年。
- 36 John Dewey, *Democracy and Education*, p.101. 前掲, 註27, 松野訳書(上巻), p.142。また, 田中智志は「デューイにとっての『デモクラシー』は, 相互依存的・相互扶助的な『協同体』を形容する言葉である」, 「協同する人びとは, それぞれに『一つの固有な潜勢力』であり, 教育の目的は, すべての子どもの固有な潜勢力を十分に発揮させること, つまりその成長を支援することである」と読み取っている。田中智志「成長と共同性——デューイの教育論」, 『教育臨床学』高陵社書店, 2012年, pp.56-57。
- 37 デューイは「教育は成長することと全く一体のものであり, それはそれ自体を越えるいかなる目的もたない」という新しい教育観を提示し, 教育は人間の絶え間ない連続的成長の過程そのものであるから, 教育は単に子どもや学校の問題に留まらないと説いた。その文脈において, 「学校教育の価値の基準は, それが連続的成長への欲求をどの程度までつくり出すか, そして, その欲求を実際に効果のあるものにするための手段をどの程度まで提供するかということ」に定められる。民主主義における教育とは何かを問う本書は, 20世紀の世界の教育界に大きな影響を与えたと評価される。John Dewey, *Democracy and Education*, p.162. 前掲, 註27, 松野訳書(上巻), p.92。
- 38 ヴァーノン・カールスン「デューイ批判覚え書」, 『デューイ教育理論の諸問題』, 刀江書院, 1959年, p.307。
- 39 John Dewey, *Individualism: Old and New*, New York: Minton, Balch, 1930, pp.28-29, p.123. 明石紀雄訳「新しい個人主義の創造」, 『ジョン・デューイ』(アメリカ古典文庫13), 研究社出版, 1975年, p.36, p.84。
- 40 John Dewey, *Democracy and Education*, p.101. 前掲, 註27, 松野訳書(上巻), p.142。
- 41 John Dewey, *Liberalism and Social Action*, New York: Putnam, 1935, p.54, p.72. 明石紀雄訳「自由主義と社会的行動」, 『ジョン・デューイ』研究社出版, 1975年, p.286, p.299。
- 42 田浦武雄『デューイとその時代』玉川大学出版部, 1984年。
- 43 大浦猛『実験主義教育思想の成立過程』刀江書院, 1965年。笠原克博『初期デューイ教育思想の課題』法律文化社, 1989年。
- 44 亀尾利夫『デューイの哲学』勁草書房, 1975年。栗田修『デューイ教育学の起源』松籟社, 1979年。栗田修『デューイ教育学の特質とその思想史的背景』晃洋書房, 1997年。
- 45 森田尚人『デューイ教育思想の形成』新曜社, 1986年。
- 46 杉浦宏訳『教育における興味と努力』明治図書出版, 1972年。
- 47 帆足理一郎訳『経験と自然』春秋社, 1959年。
- 48 鶴見和子訳「新旧個人主義」, 『世界大思想全集・デューイ』河出書房, 1960年。前掲, 註39, 明石訳では「新しい個人主義の創造」と訳されている。
- 49 中村雄二郎訳「自由主義と社会行動」, 『世界大思想全集・デューイ』河出書房, 1960年。前掲, 註41, 明石訳「自由主義と社会的行動」。
- 50 細野武雄訳『自由と文化』法律文化社, 1951年。明石紀雄訳「自由と文化」, 『ジョン・デューイ』, 研究社出版, 1975年。
- 51 前掲, 註22, 森田論文, p.110。
- 52 同上, 森田論文, p.111。

- 53 Morton White, *Science and Sentiment in America*, New York: Oxford University Press, 1972, pp.286-287. 村井実他訳『アメリカの科学と情念——アメリカ哲学思想史』学文社, 1982年, pp.325-326。
- 54 本間長世「ジョン・デューイの社会思想」, 『ジョン・デューイ』研究社出版, 1975年, p.15。
- 55 デューイの両価的目線について, 森田は「新旧両教育に対するデューイのアンビヴァレントなスタンスには, 中庸 (via media) というコトバがもっともふさわしいといえるかもしれない」と述べている。前掲, 註22, 森田論文, p.111。
- 56 *John Dewey: The Early Works, 1882-1898*, five volumes; *John Dewey: The Middle Works, 1899-1924*, fifteen volumes; *John Dewey: The Later Works, 1925-1953*, seventeen volumes, Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press, 1969-1990。
- 57 *John Dewey Correspondence*, Vol.1-2, CD-ROM database, ed. by Larry A. Hickman, IntelLex Corporation, 1992-2001。
- 58 小柳正司『デューイ実験学校と教師教育の展開——シカゴ大学時代の書簡の分析』学術出版会, 2010年。小柳によれば、『デューイ書簡集』のデータベース自体は1992年から公開されたが, CD-ROM版の刊行は1999年からである。第3巻のCD-ROM版は刊行されず, 2004年以降, 『ジョン・デューイ書簡集』全3巻のデータベースがインターネット上に公開され, 有料利用できるようになっている。
- 59 デューイはコロンビア大学と連携し, シカゴ大学とコロンビア大学で同時にEd.D.を新設する計画を有していたようである。同上, 小柳書, pp.203-205。
- 60 佐藤学『専門家として教師を育てる——教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店, 2015年。
- 61 John Dewey, “The Relation of Theory to Practice in Education”, *The Third Yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education*, Chicago: The University of Chicago Press, 1904. 佐藤学「教師教育におけるケース・メソッドの起源——デューイの『知性的方法』」, 杉浦美朗編『教育方法の諸相』日本図書センター, 1993年。中野真志「ジョン・デューイの教師教育構想——『教育の理論と実践の関係』を中心に」『愛知教育大学研究報告』(教育科学編) 63, 2014年。
- 62 前掲, 註60, 佐藤書, p.56。
- 63 松下晴彦「研究大学におけるEd.D.プログラムの意義——名古屋大学『教育マネジメント』の事例」, 『名古屋高等教育研究』10, 2010年。
- 64 Donald Schön, *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, New York: Basic Books, 1983。
- 65 John Dewey, *How We Think*, Boston: D.C. Heath, 1910. 改訂版(1933)はJohn Dewey, *How We Think: a Restatement of the Relation of Reflective Thinking to the Educative Process*, Boston: D.C. Heath, 1933. 植田清次訳『思考の方法』春秋社, 1950年。
- 66 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵——反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版, 2001年
- 67 小原國芳『小原國芳全集』(全44巻), 玉川大学出版部, 1953-1973年。
- 68 牧野篤『中国近代教育の思想的展開と特質——陶行知「生活教育」思想の研究』日本図書センター, 1993年。斎藤秋男『陶行知——生活教育理論の形成』明治図書, 1983年。
- 69 佐藤学『学校の挑戦——学びの共同体を創る』小学館, 2006年。同『教師たちの挑戦——授業を創る・学びが変わる』小学館, 2003年。
- 70 前掲, 註14, 篠原書, p.418。

付記

本稿執筆のための文献調査に際し, 岡山大学附属図書館に所蔵される第六高等学校および岡山師範学校の旧蔵図書を多く利用した。同図書館から与えられた便宜に感謝したい。

なお, 本稿の中国語版について, デューイの『民主主義と教育』の公刊100周年を記念して編まれる論集《<民主主義と教育>——百年传播和当代审视》(涂诗万主编, 北京: 教育科学出版社, 2016年)に掲載される。